

第 16 冊

『今こそ知っておきたい災害の日本史』

岳真也、PHP文庫、2013年

<下>

今回は、豊臣秀吉の時代の大地震、天正地震と慶長伏見地震を取り上げました。天正地震が起きていなかったら、秀吉の大軍が家康を滅ぼしていたかもしれないことを学びました。もし、家康が滅びていたら、江戸時代はなかったこととなります。また、慶長伏見地震がなければ豊臣政権がもう少し長く続いたかもしれないですね。でも、朝鮮出兵や秀次などへの処罰という失政がありましたから、豊臣政権は短命政権に終わりましたが。

今回、最後に取り上げる災害は、まずは江戸時代徳川綱吉の時代に起きた「**亥の大変**」と呼ばれた「**宝永地震**」と「**宝永富士山大噴火**」です。地震と富士山噴火が1ヶ月すこしの間をあけて発生します。地震もすごいですが、富士山の噴火は現代に起きたとしたら、日本経済が壊滅してしまうほどの規模の噴火でした。

また、幕末期に起きた「安政東南海地震」と「安政江戸地震」が江戸幕府に引導を渡します。

宝永地震・富士山大噴火

突然ですが、あなたは江戸幕府の15人の将軍の中で、誰が「凄い」将軍だと思いますか？もちろんNO.1は家康でしょう。それは間違いのないと思います。では、「**NO.2は誰？**」と聞かれたら、誰を答えますか？

3代将軍家光ですか？それとも8代将軍吉宗ですか？はたまた15代将軍慶喜でしょうか？

私は、**第5代将軍綱吉**だと考えます。「えーっ、綱吉？なんで？」という反応が返ってきそうですね。「天下の悪法『**生類憐れみの令**』で多くの人々を困らせた綱吉をNO.2にあげるなんて、どういうこと？」って思う人が多いのかもしれませんが、でも、断言します、徳川綱吉は「凄い」将軍だと。

ただ、今回は、綱吉がメインではないので、その点については別の機会に譲りましょう。

幕政の混乱に追い打ち

いつものように、まずは、災害の状況を見てみましょう。**宝永地震は宝永四（1707）年10月4日**に起きました。そして約50日ほどあけた**11月23日に富士山大噴火**が起きました。

と言うことは、慶長伏見地震のように「連動型」なんですか？

ちなみに、富士山大噴火はそうそう起きるものではないです。起きてもらっては困りますよね。岳真也氏の『今こそ知っておきたい災害の日本史』によれば、有史における「富士山三大噴火」というのがあって、「延暦の大噴火」「貞観の大噴火」「宝永の大噴火」がそれです。

「延暦の大噴火」と「貞観の大噴火」は、ずっと昔の平安時代に起きたものです。「宝永の噴火」の最大の特徴は、それより49日前に「宝永大地震」が発生していることです。

この地震と富士山の大噴火とを合わせて、当時の人々は「亥（い）の大変」と呼びました。詳しく『今こそ知っておきたい災害の日本史』で見てください。

地震のマグニチュードは8.4ないし8.7だと推定される。遠州灘沖から紀伊半島沖を震源として発生。南海トラフのほぼ全域にわたって、プレート間の断層破壊が発生したと推定され、「記録に残る日本最大級の地震」と言われている。

以下、現在の高知県、土佐の国で起こった出来事について書かれた『万変記』を見てみよう。

「10月4日朝ヨリ風少（すこし）モ不吹（ふかず）一天晴渡リテ雲見ヘス其アツキ事酷暑のコトク」土佐は当日、晩秋でありながら、快晴で禪一つですむような暑い日であったという。そして、突然、大地が揺れる。

そこへさらに、大波が来る、との声上がる。・・・

逃げる間にも地面揺れ続け、老人や幼児などが難儀する。あまつさえ、確かに大波はやってくる。紛れもない大津波であった。堤防を越えて高知城下に流れ込む。数百の老若男女が波に飲まれ、海に押し流される。

波が引くと、親は子らと離れており、子があれども親がない様子。また家があっても住人なく、人があっても家がない。

潮は翌日未明までに12回も町中へ浸水してきて、城下だけでも溺死者の数は400余人に上ったという。

津波は伊豆、八丈島から四国、九州にまで及ぶ太平洋沿岸に加えて、伊勢湾、大阪湾、瀬戸内海、豊後水道にまで、入りこんだ。

下田では5～7メートル、紀伊半島では5～10メートル、阿波で5～7メートル、土佐で5～8メートルと推定され、被害は特に土佐近辺で甚大であった。須崎（現高知県須崎市）では「遡上高約18メートルに達した」と目され。神田村の諏訪神社が流された。津波は長崎、済州（チェジュ）島、さらには支那

大陸の上海にまで押し寄せて、各地に被害をもたらした。江戸近辺はほとんど罹災していないが、上方が大変だった。・・・

商都大坂は特に「水の都」と呼ばれるほどで、河川や運河が多い。1800軒に上る家屋が倒壊し、川船・廻船などもおびただしく破壊された。このほか、「伊豆での高潮による被害、甲斐身延山富士河口の土砂崩れの被害」など、続々と集まってくる情報は、大地震の恐ろしさをまざまざと思い知らされるものばかり。幕府は、復旧対策に追われた。

宝永大地震の規模はマグニチュード8.4ないし8.7というのですから、途方もない大きさの地震ですね。東日本大震災のマグニチュードは9ですから、それよりは小さいことにはなりますが。

ちなみに、マグニチュードが1つ大きくなると、たとえばマグニチュード7が8になったとすると、約32倍の大きさになるそうです。さらに、マグニチュード9になれば、7の時に比べ約1000倍の規模になるそうです。

で、この時の大地震は震源が「遠州灘沖から紀伊半島沖」ということなので、大津波が各地を襲うこととなります。上記に引用したように、5メートルから10メートルの高さの津波が押し寄せてきたんですね。なかでも、今の高知県須崎市では「遡上高約18メートルに達した」と言いますから、たまりません。

東日本大震災でもそうでしたが、リアス式海岸のように海岸が入り組んでいるような場所では津波がより大きくなりますよね。とにかく、5～10メートルの津波のエネルギー・破壊力というのは想像を超えるものだと思います。

そして、この宝永大地震から49日後に富士山大噴火が起こります。詳しく『**今こそ知っておきたい災害の日本史**』で見てください。

宝永地震の余震が続くなか、11月22日の夜から富士山の山麓一帯ではマグニチュード4から5程度の地震が数回起こった。23日の巳の刻（午前10時頃）「富士山の南東斜面から白い雲のようなもの」が湧き上がり、急速に大きくなっていった。

噴火の始まりである。

富士山の東斜面には高温の軽石が大量に降下して、付近の家屋を焼き、田畑を砂礫（されき）が埋め尽くした。夕暮れには噴煙の中に火柱が見え、

「火山雷（かざんらい）による稲妻」が飛び交うのが目撃された。

この噴火は、日本最大級の地震の直後に発生している。地震の前まで、

「富士山の火山活動は比較的穏やかであった」

と言われるが、大地震の49日後に、大規模な噴火が始まった。・・・

地震の震源域となった南海トラフを東北に延長すると、駿河湾を通過して、富士山西麓の活断層「富士川河口断層帯」と連続している。宝永地震の翌日には、富士宮付近を震源とする大きな余震が発生しているのだ。

火山の噴火は、地下にあった保温マグマが地表に出る現象である。火山の地下には直径数十キロ程度の「液体マグマの塊（マグマ溜り）」が存在する、と想定されている。

富士山のマグマ溜りは、「宝永地震の強震域」にあり、富士宮の余震はマグマ溜りのごく近くで発生した。

最も被害が大きかったのは、登山口に位置する須走（すばしり）村（現・静岡県小山町）で、全戸数75戸が倒壊ないしは焼失し、一瞬にして全村壊滅という状況である。



宝永の富士山大噴火を描いた絵図



富士山の宝永火口

凄まじい爆発ですね。マグマのエネルギーの破壊力は凄いです。筆者が小学生か中学生の頃には、富士山は「死火山」と教わったように思いますが、現在は「休火山」と位置づけられていますね。

岳真也氏の『今こそ知っておきたい災害の日本史』の続きを見てみましょう。

検使として現場に駆けつけた小田原藩士は、

「浅間神社の鳥居は半分以上が埋まり、拝殿は屋根だけが見える」

と、その惨状を報告。

富士山の真東にあたる大御神（おおみか）村の名主・六左衛門は、

「この世の終わりと観念し、髪を剃り、怒る富士を前にして寺院の引導を受けた」

と、その恐怖の体験を語っている。また、遠く離れた江戸でも一時は辺りが暗くなり、降り注ぐ灰のために傘をさして歩く者もいたという

この宝永の噴火は、当初の被害の大きさもさることながら、降灰による影響が長期にわたった。飢饉である。例えば2年経った宝永6年2月の時点で、御殿場付近の7カ村の住民のうち、55%が「飢人」と記録されている。

津山藩の『江戸日記』では・・・南海の方から地車のような音が響き、障子がビリビリと鳴り。雷のような音が聞こえ、富士山の付近に煙と稲妻の如き火の玉が見えた、というのである。

このあと、日記はこんなふうに行く。

「二十三日には砂が降り、浮石のような石も混じっていた。砂の色は黒く、鉄の粉のように黒かった。そのまま置いたら、2尺（約60センチ）ほどたまっただろうか。2、3寸（6～9センチ）ほどは12月10日まで毎日のように降った。

町では道路脇に砂を吐きよせ、5尺ほどの土手のようにしていた。

煙のせいで、あたりは本曇りの時のように暗くなり、昼も行燈（あんどん）を立てておいた。夜はさらに暗いことは、言うまでもない。

火山が爆発して怖いのは、溶岩や火砕流が流れてきて田畑や家屋などを焼き尽くすということです。そして、引用文にあるように、大空に飛び散らかした灰・砂が降ってくることでですね。大きな砂礫が落ちてきたら人命を奪うことになり、灰や砂の場合はそれが降り積もったら生活を破壊してしまうことになります。

灰や砂が積もってしまった田畑は使い物にならなくなり、作物はすべてアウトです。そして、細かい灰ならば、現代社会では深刻な状況を作りだしてしまいます。道路や鉄道は使用不可能になります。洗濯なんかできませんし、マスクやゴーグルをしていても外を出歩くのは困難です。

心配になったので、「**内閣府防災担当**」で作成された『**降灰による影響の閾値（いきち）の考え方**』（令和2年4月）という47ページにわたるPDF資料を調べてみました。

火山灰によって発生する影響として「交通インフラ」「ライフライン」「建築物・使節設備」などにわたる「波及イメージ」が具体的なデータとして掲載されています。

火山灰によって車も電車も使えなくなります。線路に0.05ミリ以上積もったら電車は運行停止になるそうです。0.05ミリですよ！！自動車も10センチ積もったら運行不能になります。そこまで積もらなくても道路は使えなくなります。だって、白線や横断歩道など見えなくなりますね。信号もストップします。飛行機も滑走路に灰が2ミリ積もると使用不能になるそうです。

ライフラインも電力・上下水道・通信・建物の空調などもアウトですね。情報機器もアンテナがダメになりますから使えません。

生産活動にしても社会活動にしても、江戸時代とは比較にならないほど甚大な被害になります。ですから、コロナ禍の今、起きてほしくないのが、大地震（大津波）と富士山の大噴火だと思います。

話を元に戻しましょう。綱吉の時代と言えば「元禄」と言うイメージがないですか？いつから宝永なんでしょう？

今回取り上げていないのですが、実は、元禄16（1703）年11月に、江戸を含む関東一円を襲った「**元禄関東大地震**」がありました。この元禄関東大地震によって全国で15万余の死者が出ました。縁起が悪いということで、翌年の3月に「元禄から宝永」へと改元されたのです。

その宝永は8年まで続き、その間に「宝永地震」と「富士山大噴火」が起きたのです。ちなみに、元禄は1688年から1704年までということになります。

つまり、**元禄関東大地震の4年後に、またも南海で宝永大地震、さらに富士山大噴火が起きた**のです。これは、被害地域の人々はもちろん大変ですが、幕府や藩の為政者にとっても大変ですよ。

復興のために、莫大なお金や人手がかかることになります。江戸時代も初期ならば、佐渡の金山や生野の銀山など金や銀が豊富にありました。ところが、元禄時代に入る頃には金や銀が枯渇してきます。

幕府にとっては財政収入が激減します。そんなところに莫大な財政出動をしなければならなくなるのですよ。

コロナ禍の日本でも、巨額の対策費が使われています。すべてを税金でまかなえば良いですが、企業や個人の経済状況も悪くなっていますからそれは見込みありません。そこで政府がするのは、国債発行という借金ですね。

江戸幕府も相次ぐ震災に対処するために、富士山大噴火に対して、いろいろと対策を講じます。

まず、翌年に被災地は小田原藩領でしたが、**幕府直轄領**に変更します。



第5代将軍
徳川 綱吉

さらに、幕府は災害復旧費用に当てるために、直轄領だけではなく、全国の大名に対して「**諸国高役(国役)金**」を発令しました。臨時に不動産税を納めさせたのです。幕府直轄領だけではなく、大名領までも含めて全国一律に高役を課したのは、もちろん初めてです。

ここで、質問です。**この国役金は高100石について、いくら納入させましたか？**

答えは、**高100石につき、2両納入**させたのでした。その結果、**約49万両の国役金**が幕府に上納されたんです。

ちなみに、**集まった49万両の内、実際に復興資金として使われたのはいくらぐらいだと思いますか？ 次の四択から教えてください。**

- ①約6万両 ②約12万両 ③約24万両 ④約48万両

答えは、**①の約6万両**でした。

えっ、たったの6万両！？集められたお金の8分の1でしかないですね。**残りの43万両はどうしたのでしょうか？**

これらは、**一般歳出に振り向けられた**んです。富士山麓の村々を中心に復興費用として集められたお

金が、本来の目的とは全く違うことに使われたんですね。こんなことは現代日本でもありそうですが。

待ってください。と言うことは、必要なところにお金が使われなかった、ということになりますよね。したがって、富士山麓の村々の復旧事業は遅れに遅れてしまい、復旧工事を完全に終え、災害から立ち直ることができたのは、なんと、幕末近くになるんです。

ちなみに、**この時に勘定奉行だった人物こそ、「元禄小判」を鑄造した人物です。誰でしょう？**

そうですね。**荻原重秀**ですね。**元禄小判を造った頃は「勘定吟味役」**でした。

さて、将軍徳川綱吉が長男・徳松に次いで長女の鶴姫までも亡くし、ついに兄・綱重の子（綱吉の甥）である甲府宰相・綱豊（つなとよ）を養嗣子として江戸城西の丸に迎え入れることになりました。

この綱豊が**「家宣（いえのぶ）」**と改名して、宝永6（1709）年に亡くなった綱吉のあとを継いで、**第6代将軍**に就任します。

この家宣は、のちに**「正徳の治」を推進する新井白石**を「儒学並びに政事の師匠」とします。白石の示唆を受けて、綱吉の葬儀もすんでないにもかかわらず、家宣は、「生類憐れみの令」を撤廃します。綱吉の「憐れみの令を遺せ」という遺言があったにも関わらず。



6代家宣、7代家継の
侍講 新井白石

次に、災害の影響とその後の社会について見ていきましょう。『**今こそ知っておきたい災害の日本史**』での記述は以下のようになっています。

駿府の『藤原小一郎（こいちろう）日記』から、その後の復旧の様子を見てみよう。

まず、小一郎は自分の領主の近藤用清（もちきよ）をはじめとする歴代の領主は、よく先祖の遺風を守り、大いに領民に尽くした、と書いたのち、こう続ける。

「大震災にて細江湖岸一帯及び都田川流域凡そ千八百石余の土地陥落し、沃野は忽ち変じて潮田となり、収穫の途全く絶えて、民悲惨になく」

用清は代官の大草太郎左衛門と話し合い、復旧工事に力を注ぐこと、ほぼ20年、約五百石の用地を復

旧させた。

その子・用随は父のあとをうけつぎ、堤防を築いて潮水の侵入を防ぎ、新しい運河を掘って川の水があふれるのを防いだ。また、

「溝をうがって排水灌漑をおこない、船便を計画する」などして、復旧工事の継続に努力すること、ほぼ30年、八百石の田地を回復させた。

その後の領主たちによって、なおも復旧工事は進められ、弘化元（1844）年をもって、完全に回復した。

宝永の震災以降、弘化元年に至るまで、およそ130年余、領主たちは、この復旧事業に心血を注いだ。用随は、この田に適合する琉球蘭の苗を豊後（現・大分県）国から持ってきて植樹させた結果、「年と共に漸次隆盛に趣き現今に至りては遠州表の声価遍（あまね）く海内に及び本町生産業の大半は全く漸業の発達に拠るに至れるは是れ皆用随以下各地頭の賜物によらざるはなし」とある。

先ほど書いたように、江戸時代のほぼ真ん中の時期に起きた宝永富士山大噴火の被害が、弘化元年になってやっとのこと、約130年かけて完全に復旧することができたのです。

「もっと早く復旧できたはず」だとは思いますが、現地の代官や名主・庄屋（百姓のリーダー）たちの地道な働きがあったおかげで、ブルドーザーのような大型機械が無いなか、長い時間はかかりましたが、復旧にたどり着けたんですね。多くの人々の努力や奮闘に、頭が下がります。

江戸幕府の財政破綻

ところで、綱吉の時代に関して山川出版社の教科書『詳説日本史B』では、次のように書かれています。

綱吉の時代は、幕府財政も転換期を迎えた。比較的豊かだった鉱山収入は佐渡金山などの金銀の産出量が減少し、財政は収入源となった。そのうえ前代の明暦の大火後の江戸城と市街の再建費用、引き続き元禄期の寺社造営費用は大きな支出増となり、幕府財政の破綻をまねいた。

そこで勘定吟味役の荻原重秀は、収入増の方策として貨幣の改鑄を上申し、綱吉はこれを採用した。改鑄で幕府は金の含有率を減らし、質の劣った小判の発行を増加して多大な収益を上げたが、貨幣価値の下落は物価の騰貴を引き起こし、人々の生活を圧迫した。さらに1707（宝永4）年には富士山が大噴火し、駿河・相模などの国々に降砂による大被害をもたらした。

幕府の財政破綻の主要な原因が綱吉にあるかのように読めます。でも、東日本大震災を見たらわかるように、復興には莫大な費用と時間がかかります。ですから、災害による財政出動が江戸幕府の財政破綻を招いているのであって、「寺社をたくさん造ったから」とか「お犬様に金がかかったから」とかは枝葉末節だと思います。

ところで、「綱吉の時代」と言えば、「元禄時代」。元禄時代と言えば「元禄文化」ですよね。**元禄文化の特徴って何でしたか？**

まずは、**上方中心の文化**ですよ。そして「**元禄三大文学者**」が活躍した時代でした。関東は元禄関東地震や宝永大地震、そして富士山大噴火によって大きな被害が出ましたが、幸いなことに、関西はそのような被害に遭いませんでした。

元禄から宝永に変わっても、「元禄文化の余韻」とも言うべき頃合いで、依然、歌舞伎や浄瑠璃などが盛んでした。ただ、災害が相次ぐなかで、人々の心境に少なからず変化が見えてきたようです。

天災はいつやってくるか、わからない。地震に津波、洪水などで、人は誰も、いつ死ぬか、知れたものではないのだ。ならば、「現在（いま）のこの時を楽しもう」との考えが広まっても、不思議ではなかった。

それは「文化の花」というよりは、燃え上がり、燃えつくす「文化の炎」のようなものだったのではあるまいか。

『今こそ知っておきたい災害の日本史』は、上記のように指摘しています。さらに、続きます。

同じ頃、わが国の数学史上に偉大な足跡を残した**関孝和**が72年の生涯を閉じた。

幕臣・内山永明（ながあきら）の次男に生まれた孝和は、親戚の関家の養子となり、前述の甲府藩主徳川綱重とその子・綱豊に仕えて勘定吟味役をつとめた。

そして宝永元（1704）年4月、綱豊が将軍綱吉の世子として江戸城に移ると、これに従って幕府直参の士となり、御納戸組頭に任ぜられる。

孝和の才能は、早くも処女作『規矩要明（きくようめい）算法』での円周率などに関する研究に示されたが、延宝2（1674）年には、天元術（代数的方法）にも理解を示す『発微算法』を刊行。

この後、約10年間、曆術研究に熱中して著述は途切れたものの、

「天文曆学者・渋川春海（しぶかわはるみ）の上表した改曆案」が採用されると、孝和は再び数学の世界に戻り、それまでの研究を書物にまとめることに集中、「関流和算」を完成させた。

近松や西鶴、芭蕉に光琳、師宣らもそうだが、語呂合わせなどではなく、

「天災が重なるときには、天才が輩出する」

これは、ただの偶然であろうか。

うーん、「天災が重なるときに、天災が輩出」しますか。確かに、危機的状況のなかで、人類は何をなすべきか、何ができるかを、真剣に考えて対処しようとしていますよね。現在、世界中がコロナ禍にあります。この危機的状況を解決するために、科学者を中心に様々な努力や工夫が行われています。そして、何年もかかると言われた「ワクチン」が、2021年の今、パンデミックが始まってから、わずか1年もたたないうちに実用化されています。

江戸時代にも科学的な発展が見られました。元禄期から宝永期で代表的なものが**関孝和の和算**や**渋川春海の改曆**ですね。ほかにも、本草学や農学・医学などの実用的な学問が発達しました。

そこで、いくつか質問をしますよ。

本草学と云えば、**貝原益軒**が有名ですが、彼の著書を教えてください。

答えは、『大和本草』でした。

次に、『農業全書』などの農書を書いた人物は誰でしょう？

著者は宮崎安貞でした。

渋川春海が出てきましたが、彼が日本人として初めて作り上げた暦を何と言いましたか。渋川春海になる前の名前は何でしたか？

貞享暦と言いました。幕府は天文方を設置し、**渋川晴海**を任命しました。もとは**安井算哲**です。彼を主人公にした小説が**沖方丁（うぶかたとう）氏の『天地明察』**でした。

安政東南海地震

次に取り上げるのが「安政東南海地震」です。江戸時代末期に起きた大地震です。この時期、日本に外国船がやってきます。彼らもこの大地震で被害を受けることになります。

幕末外交史に影響をもたらす

まずは災害の状況を確認しましょう。地震が起きたのは**嘉永7（1854）年11月4日と5日**です。あれっ、2日間も続いたの？と思われそうですが、別々の地震が30時間の間に別の場所を震源として起きました。

岳真也氏の『今こそ知っておきたい災害の日本史』で、状況を見ましょう。

激動の幕末、日本列島は揺れに揺れた。

ことは政治や軍事、社会的な事件ばかりではない。江戸の末期、わけても、嘉永から安政にかけて、1850年代の日本は、次々と大きな地震に見舞われている。

嘉永6（1853）年2月には小田原地震（マグニチュード6.7）が発生、1000戸以上の家屋が全壊した。翌嘉永7（1854）年6月には、伊賀上野地震（マグニチュード7.25）によって1500人以上の死者が出た。

そして同じ年の11月4日に、巳の刻（午前10時頃）近くに安政東海地震（マグニチュード8.4）、翌日5日の申刻（午後4時頃）わずか30時間後に安政南海地震（マグニチュード8.4）が起きている。

この二つの地震では、関東から九州南部という広範囲で、震度5以上の揺れが体感された。

東海地震の震源は駿河トラフで、津波は現在の千葉県南部にあたる安房から四国の沿岸にまで達した。南海地震は南海トラフを震源としているが、この双方の海域では、

「二つの地震がほぼ100年から150年おきに連動して発生する」といわれている。

直近の「3.11」東日本大震災もそうだが、海溝型の地震の場合、揺れによる被害よりも、津波による被害の方が大きいことが多い。この時も沿岸部を中心に、各地に到来した津波によって多数の犠牲者を出している。

11月4日に発生した東海地震では、最も震度が大きかったのは、箱根から浜名湖に近い沿岸部で震度6以上。甲府・松本などの盆地でも震度6。

三島、掛川などの東海道の宿場町は火災による焼失もあり、全滅と言っていいほどの被害を受けた。

被害は東南海ばかりか、北陸や近畿にも及んだが、商都大坂も二日前の南海地震の引き起こした津波によって被災している。

当時の大坂は外海から市中に物資を運ぶため、いたるところに水路（堀）が張り巡らされていた。そこへ津波が侵入したのだ。当時、

「地震の時には船が一番安全」という誤った認識があったらしい。

道頓堀や土佐堀など、水路という水路には、前日の東海地震に驚いた町民が家財道具を積み込んだ小舟が、びっしりと浮かんでいた。

南海地震発生から約2時間後、大坂沿岸にも2メートル近い津波が到達。逆流に乗って湾をさかのぼった大船が次々と小舟を押しつぶし、橋という橋を破壊していった。・・・・・・・・・・・・・・・・

この両日の地震によって倒壊した家屋は、全国でおよそ3万戸、死者は2000人から3000人とされている。が、連続して起こった二つの地震の被害を識別するのは困難であったろう。

そんなこともあって、前日の東海地震と次の日の南海地震を合わせて、一般に安政東南海地震と呼ばれているのである。

ちなみに、地震が起こった時点では嘉永7年だが、直後の11月27日に「政（まつりごと）安らかなれ」との意味で、「安政」と改元され、この年がその元年となった。

そう言えば、大阪の町、特に川沿いを歩いていると石碑に出くわすことが多いです。大正橋東詰に作られた**石碑『大地震両川口津浪記』**には被害の大きさや「二度と過ちを繰り返すまい」という思いが込められています。



『大地震両川口津浪記』

さて、この地震が起きたのが1854年11月はじめてでした。何か気がつくことはないですか？

ペリーが浦賀にやってきたのが1853年でした。翌年に来ると言って一端引き上げ、翌年にやってきました。そして**日米和親条約を締結**しました。同じ頃、ロシアも日本に開国を求めていました。そして、この安政東南海地震は、どちらもマグニチュード8.4という巨大地震ですが、滞日中だった黒船=異国の船にも被害をもたらしました。

11月4日の東海地震の際、幕府首脳はロシア側（艦隊提督の**プチャーチン**ら）と外交交渉中でした。交渉の場となった寺は被害を免れます。でも、プチャーチンらの帰船を待つ下田に停泊していたロシア軍艦「**ディアナ号**」は、地震の直後に、津波の到来に遭遇してしまいます。

当時の「イラストレイテッド・ロンドンニュース日本通信」に、ロシア士官の覚え書が掲載されているので、見てみよう。

「9時45分、船は約1分間ひどい揺れを感じた。・・・海上は全く静穏であって、それ以上は何事が起ころうとも思われなかったし、船上の作業は続けていた。午前10時、大波が湾内へうねりながらやってきた。

また、プチャーチンとの交渉を担当した**幕府勘定奉行・川路聖謨（としあきら）**の『下田日記』には、次のような記述がある。

「ロシア船も3人まで助けたり。ロシア人の話では、同船脇を100人も、其の余も通りたりとなり。ロシア人は死せんとする人を助け、厚く療治の上、あんままでするなり。助けられる人々、泣きて拝むなり。恐るべし。心得べき事なり。」

なんと、自らが沈没しかけている中で、ロシア人は救援活動を行っているんです。素晴らしいですね。そして、これに報いたのが駿河国宮嶋村（現在の静岡県富士市）の人々でした。



津波に襲われるディアナ号

この時、ディアナ号は既に船内に海水が侵入してきていて、舵（かじ）が効かなくなっていたのです。それで、やむなく目的地の戸田ではなく、宮嶋村に上陸したのですが、村人たちは献身的に修復作業を手伝い、また衣食なども与えてロシアの乗組員らを助けたといえます。

「困ったときはお互い様」の見本のようなお話ですね。異国の地での大災害ですから、ロシア人は大いに困ったことでしょう。近年の日本での災害でも、観光客の外国人や仕事で滞在中の外国人も恐怖を感じたでしょうし、言葉は通じないから日本人以上に不安になったりしたでしょう。

次ページに、このころに日本にやってきた外国船関係の年表を作ってみました。参考にしてください。

＜ペリー来航前の時代概況＞

弘化元（1844）年 弘化3（1846）年	オランダが幕府に開国を勧告 →幕府は翌年拒否 4月には英仏の軍艦が琉球へ渡来 5月にはアメリカ戦が択捉島に漂着 フランス船2隻が琉球に来て通商の開始を要求している 閏5月、 アメリカ東インド艦隊司令長官ビッドルの浦賀来航 →通商拒否
弘化4（1847）年	2月、幕府は房総と江戸湾の警備に着手 彦根、川越の両藩に安房国、会津藩と忍（おし）藩に上総国の警備命令 佐賀藩主鍋島直正 が長崎に砲台を増築、大砲100門を備える許可を幕府に申請→幕府却下
嘉永元（1848）年	5月に蝦夷の松前、6月に利尻島にアメリカ人が漂着→長崎に護送 8月、幕府は 高島流砲術 を「西洋流」と改称、「実弾射撃の訓練」を許可 この年、江戸湾に面した品川に砲台を築く
嘉永2（1849）年	閏4月、イギリスの測量船「マリーナ号」が浦賀に来航、江戸湾を測量した後、伊豆下田に入港→ 伊豆韮山（にらやま）代官・江川英龍（ひでたつ、太郎左衛門） が駆けつけ、退去勧告
嘉永3（1850）年	4月、朝廷は7社7寺に外患攘夷を祈祷させる勅を下す
嘉永4（1851）年	薩摩藩主になったばかりの 島津斉彬（なりあきら） が鹿児島に製錬所を作る
嘉永6（1853）年	6月 アメリカの東インド艦隊司令長官ペリー提督 率いる4隻浦賀に来航→米大統領フィルモアの国書を幕府に手渡し開国を要求

ペリーは、翌7年の2月、今度は7隻の軍艦を引き連れて江戸湾の小柴沖に錨をおろします。やむなく幕府は**日米和親条約**を締結し、下田と函館の開港を認めました。ついで、イギリス、フランス、ロシア、オランダなどの列強とも条約を結び、220年ほども続いた鎖国体制は終わりを告げます。

当然ですが、江戸市中は大騒ぎとなります。「元寇以来の外患」という者もいたそうですが、この時には「神風」は吹きませんでした。それどころか、2度目の黒船来航から1年と経たないうちに、日本の東南海は巨大な地震に襲われたのです。

ところで、ディアナ号のロシア使節ブチャーチンですが、安政元（1854）年12月21日には、粘り強い交渉を行った結果、日本側が折れて、**日露和親条約**が締結されます。この条約で、下田と箱館（函館）、長崎を開港することが決まります。

では、**日本とロシアの間の国境はどう決まったのでしょうか？また、樺太はどうなったのでしょうか？**

千島列島の択捉島と得撫（ウルップ）島の間¹に国境を設置します。そして、「樺太を両国雑居地とする」と定められました。

突然ですが、あなたは『**稲村の火**』という話を知っていますか？私も磯田道史氏の『**天災から日本史を読みなおす**』で知ったのですが、安政の東南海地震を語る時、忘れてならないのが**濱口儀兵衛（悟陵）**の活躍です。



「小学国語読本」

岳真也氏の『**今こそ知っておきたい災害の日本史**』で紹介されているので、見てみましょう。

昭和12（1937）年から約10年間、太平洋戦争をはさんだその時期に、ずっと「小学国語読本」（5年生用）に掲載されていた童話がある。

地元和歌山の小学校教師・中井常蔵作の『**稲村の火**』で、この安政東南海地震の当時、紀州藩広村（現在の和歌山県広川町）に実在した**豪商の七代目濱口儀兵衛**の話である。

儀兵衛が暗闇の中で、自ら収穫したばかりの稲村（脱穀後の稲の山）に火をつけ、
「津波の襲来から逃げ遅れた村人を高台の神社へ誘導した」
という史実を元としているのだ。

高さ10メートルに及んだ津波の第1波到来の後、儀兵衛は迷うことなく**稲村に松明で火をつけた**。それを目印にして人々が高台に駆け上がった直後、第二波が押し寄せたという。儀兵衛の機転のおかげで、多くの人命が救われたのである。

『稲村の火』には、元本がある。明治29（1896）年の「明治三陸大津波」の翌年、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が書いた短編『**Living God（生ける神）**』だ。

幕末の東南海地震の実話が脚色され、主人公は高台に住む年老いた庄屋の五兵衛とされている。

小説のモデルとなった儀兵衛は、この時36歳。津波で被災した広村を救うべく、巨額な私財を投じ、自ら復旧作業に当たった。

困窮した人々のために米200俵と、50軒の住居を提供。さらに将来に備え、海岸に高さ5メートル、長さ600メートルの堤防を築く。

その四年間に及んだ工事の担い手として、職を失った広村の人々を雇用し、給金も与えたという。

安政東南海地震から92年後、昭和21（1946）年の昭和南海地震の際には、この堤防によって、被害を最小限に食い止めることができた。

村人たちに、大事な大事な「稲の山」（稲村）に火をつけて、津波の危険を知らせたのです。そのおかげで、多くの命が救われたんです。家屋や自動車などの財産ももちろん大事ですが、人命の方がはるかに大事。とっさのことですから、多くの人はずうろつするばかり。こういうときに、肝の据わった人が活躍するのですね。そんな人になりたいですが、「口（で言うの）は易く、行方は難し」ですね。

ところで、「ディアナ号」はその後、どうなったのでしょうか？

ディアナ号を修復しなければなりません、下田は壊滅状態でどうにもなりません。そこでディアナ号を戸田（へだ）へ移すことになりましたが、その回航のさなかに、今度は台風に遭遇して沈没してしまいます。

これに対して、幕府はディアナ号に替わる新船を建造することを決定します。葦山奉行の江川英龍に、被災後の下田の取り締まりにあたりと共に、「西洋式帆船建造の総指揮をせよ」との命令が下ります。

そこで、全国から大勢の船大工や職人が戸田に集められ、わずか3ヶ月で本邦第1号の西洋式帆船が完成したのです。凄いと思いませんか？ 船大工の棟梁7人を中心に総勢200人が携わるのですが、今まで西洋式の船を一度も造ったこともないんですよ。

幸いなことに、ディアナ号の積荷として載っていた雑誌『海事集』がありました。それに掲載されていた製図法を参考に見よう見まねで造っちゃうなんて、やはり日本人は器用なんですかね。

こうしてできた87トンの新造船に「へだ号」という名前を付けたのは、ロシア艦隊を率いていたプチャーチンだったそうです。よほど嬉しかったのですね。

この話はまだまだ続きます。

その後、川路と共にプチャーチンとの条約修正交渉に当たっていた幕府目付の岩瀬忠震が、戸田号の建設現場で習い覚えた技術を活かして、

「小型の洋式帆船を自力でこしらえてみようではないか」

と思いつき、同地に残った大工たちに指示して、自ら監督にあたった。

結果、二本マストの小さなスクーターながら、洋式の竜骨を備えた船が10隻ほども建造された。戸田が君沢佐波郡にあったので、それらの船は「君沢型」と呼ばれるようになったが、

「日本の近代造船技術の基礎は、この地震をきっかけに固められた」

とも言える。

実際、同年の7月には長崎に海軍伝習所が設けられ、4年後の安政6（1859）年には、江戸の講武所内に軍艦操練所が開設された。

さらに慶応元（1865）年、横須賀に日本初の造船所（当初の名は「横須賀製鉄所」のちの「海軍工廠」）の建設が開始されるが、戸田号や君沢型の建造に関わった大工の中には、欧米に留学し、その造船所の技士となったものがたくさんいる。

うーん、危機的状況を克服していくなかで、新たな発想や工夫が見いだされ、それらの技術や知識、経験が、その後に活かされていったのですね。普段は時の流れがゆったりしているのに対し、災害など

の危機的状況の時は時間の流れが速くなっていく感じがします。

そんなときに、普段なら気づかないことやできないことに気づいたりできるようになったのです。「火事場の馬鹿力」ではないですが、持っている力を120%発揮することができるのですね、人間は。

コロナ禍でも、これ迄のやり方を変えて、新たな発想で、危機を乗り越えている個人や会社のニュースを見たり聞いたりするにつけ、人々の無限の力を感じます。自分を信じること、未来を信じることで、明日を変えていくのですね。

で、こういう危機の時に新しく登場したものがあります。

東海道筋が壊滅的な被害を受けたことで、江戸・大阪間の交通は一時寸断されてしまいました。あなたは、災害の時に一番必要なものは何だと思いますか？ もちろん、水や食料が必要ですよね。水や食料があれば生きていくことができますからね。あと、トイレも生理的に必要欠くべからざるものですが。

その次に何が必要でしょうか？私は何とんでも「情報」だと思います。「災害」ではなくて「災難」の時に、ラジオが役に立ったという話を聞きました。**ソ連のゴルバチョフ（当時は大統領）**氏の話です。彼は奥さんとともに**保守派のクーデター**によって捕らえられ監禁されてしまいます。その際、ラジオから「反保守派」の人々の抵抗運動が盛り上がっていったことが報道されて、希望を抱くことができたそうです。災害と災難とは異なりますが、「危機的状況」というのは同じですね。

ちなみに、ここで質問です。**この時のラジオは日本製なんですが、どこのラジオだったのでしょうか？下記の4択から選んでください。**

①東芝製

②ソニー製

③パナソニック製

④三菱電機製

どうですか？実は、**②のソニーのラジオ**だったそうです。ゴルバチョフの奥さんは解放された後、「ソニーのお陰で元気が出た」と話されていたそうです。

閑話休題。東南海地震のあとの日本に戻りましょう。このとき「生きた情報を渴望する庶民にとって、なくてはならない存在」となったのが、**瓦版（かわらばん、今の新聞紙）**なんです。

もちろん、瓦版はペリーの来航前から販売されていましたが、この地震を契機に大量に出回るようになったんですね。地震の被害状況が明らかになると、これを伝える全国版の瓦版も登場したそうです。災害時には、「いつにもまして情報が必要になる」んですね。

似たような状況で思い出すのが、テレビです。日本でテレビ（当時は白黒テレビ）が普及するきっかけとなったが、「現上皇」の御成婚ならびに**東京オリンピック**でした。両方とも災害とは真逆で、お目出度いニュースやイベントです。多くの日本人がテレビ画面に釘付けになりました。

安政江戸地震

今回のシリーズで最後に取り上げるのが、幕府の屋台骨を揺るがした「安政江戸地震」です。歴史に「if」はつきもの？ですが、もしこの大地震がなかったら、江戸幕府の滅亡もなかった、あるいは違う形で歴史が動いていたかもしれません。

幕末の政局に大影響を与えた

まずは、**岳真也氏**の『**今こそ知っておきたい災害の日本史**』から、災害の状況を確認しましょう。

日本史における幾多の地震災害の中でも、この安政江戸地震ほど当時の政治や社会に大きな影響を及ぼしたものはないだろう。

「ときは動乱の幕末、ところは徳川幕府の置かれた江戸であった」ということもある。

その地震は、先にふれた「安政東南海地震」からわずか11ヶ月後の、**安政2（1855）年の10月2日、亥の刻（午後10時頃）**に起こった。マグニチュードは**7前後**、震源は**江戸湾北部**、深さは**約40キロ**と推定される。

最も揺れが激しかったのは、江戸の中心部と周辺地域。震度**5弱**から**6強**であった。

同じ江戸市中でも、揺れの強さにかなりの幅があったが、それは

「それぞれの地区の地盤の違い」

による。震源に近い本所、深川、浅草などは、もともと低地の埋め立て地であったこともあり、日比谷の入江と並んで、最も揺れが激しく、倒壊した家屋は**14000戸**に及んだ。日本橋や神田は震度**5弱**から**5**程度で、家屋の倒壊もほとんどなかった。しかし、土蔵が壊れた家が多かったという。

江戸直下を震源とするこの地震では、津波こそ起こらなかったものの、何よりも甚大だったのは、「**火災による被害**」であった。

市中の三十数箇所から火の手が上がり、おびただしい焼死者を出した。あけても吉原では、

「遊女や客など、**1000人以上**もの人が犠牲になった」

と言われる。唯一の出入口であった大門に、廓（くるわ）内の人々が殺到したことが、その原因である。

遊郭は前借りで働く遊女が逃げられないよう「おはぐろどぶ」と称される堀に囲まれていた。緊急時用の反り橋がいくつかあったが、地震発生時にその橋は降ろすことができなかった。

地震の揺れでゆがんだか、長年使用しなかったため錆び付いていた、とも指摘された。明暦3（1657）年の「明暦の大火」後、吉原は「新吉原」として三谷（さんや）田んぼを埋め立てた軟弱な地盤に移転

していた。地震発生の夜10時は、吉原が最も賑わいを見せる時間であったことも災いした。

安政江戸地震による死者は、1万人に上るといふ。結果的に吉原では、その1割を占める死者を出したことになる。

人口が集中している大都市の直下型地震だけあって、被害に遭った人の数が膨大ですよね。死者1万人、その1割が吉原での被害だったというのも都市ならではのことかもしれません。

江戸時代も末期とあって、「火災による被害」が詳細に残されています。当時の町奉行井戸対馬守（つしまのかみ）が『安政地震焼失図』にまとめています。

この記録によれば、焼失面積は1.5平方キロメートル（2.2平方キロとの説もある）。これは東京ドームの32倍にあたる。

東京ドームといえば、その近辺、江戸の北西小石川や春日一帯も大きな被害を出し、当地にあった小石川の水戸藩上屋敷も震度6の激震に見舞われた。邸内では死者46名、負傷者は84名に上った。

前水戸藩主徳川斉昭と藩主の慶篤（よしあつ）は難を逃れた。しかし、斉昭の片腕であった藤田東湖は落命した。母親を連れていったん外へ避難したが、火鉢の火を消し忘れた母親が戻ろうとしたため東湖も引き返し、天井の梁の下敷きになった。

執政の戸田忠敬（ただあきら＝蓬軒ほうけん）もこの地震で圧死。

「水戸の両田」と言われた二人を失った・・・・・・・・・・・・・・・・

地震が起きた頃、前水戸藩主の烈公（れっこう）・徳川斉昭（なりあき）は海防参与とになっていました。実は斉昭は海防の強化や「異国船打払令の断行」を唱えていて、「攘夷過激派の巨頭」と目されていました。開国策を取らざるを得ない阿部正弘ら他の幕府首脳にとっては、いわば「獅子身中の虫」を取り込むことで、「懐柔しようとした」のかもしれませんが。

その斉昭の両腕と言っても良い藤田東湖と戸田忠敬がこの地震で亡くなります。徳川斉昭にとっては両腕をもがれてしまったといってもいいような状況ですね。NHK大河ドラマ『青天を衝け』でも渡辺いっけいさん演じる藤田東湖が亡くなり、竹中直人さん演じる斉昭が号泣するシーンがありました。

『今こそ知っておきたい災害の日本史』で、災害の影響を見ていきましょう。

地震後、最優先で復旧が進められたのは幕閣の役宅であった。

老中、若年寄、寺社奉行の12家には、藩邸再建の資金を10か年無利子で貸し出されている。それ以外の大名家は国元から資金、人足などを調達、自力での復旧につとめた。

この安政江戸地震当時、老中の首座は阿部正弘であったが、7日後の10月9日、阿部は幕府中枢の空気を刷新するためと

「おのれは震災復興対策などの内政に専念しよう」と、心して、「蘭癖」と呼ばれるほどに洋学好みの開国派、佐倉藩主・堀田備中守正睦（びっちゅうのかみまさよし）に老中首座を譲った。なおも執拗に交易の開始や開港・開市を求めてくる列強側の対応を、堀田に一任したのである。

阿部ら幕閣の主導する復興は、あくまでも武士優先であったが、それでも地震発生直後から、町奉行所は迅速な働きぶりを見せた。

月番の南町奉行所に駆けつけた与力、同心らが直ちに評議し、9項目の対策を決定、実行しているのだ。・・・・・・・・

幕府による復興対策が武家に偏るなか、火災などのたびに自助組織を立ち上げて町人たちは、

「自主的な復興支援」を進めていく。5日には、被害が甚大であった所に、町会所による「御救い小屋」が建てられた。浅草広小路、深川海辺町、幸橋門外、上野山下、深川八幡の5箇所に加え、上野寛永寺管主も小屋を提供した。

同時に、炊き出しも行われている。この頃米価は安定しており、町会所などの非常用の備蓄も十分にあった。

裕福な町人は、生活の基盤を失った人々に施行（せぎょう＝義援活動）を行った。

「災害時の施業は社会的義務」とされ、幕府もこれを奨励して、その名前と施業額を番屋に張り出すなどした。

地震直後から建物の再建を始められ、大工や左官、とび職など、職人は引く手あまたで、賃金相場が急上昇した。

南北の奉行所から市中に出される「町触れ」では、再三再四、

「諸物価や職人手間賃を高値にしてはならない」

と告げられている。しかし、全く効果はなかった。

震災復興は、長屋住まいでその日暮らしの職人など、

「困窮した人々の暮らしを豊かにする」

といった側面もあった。「震災景気」によって衣食住以外にも目が向くようになった職人たちが、吉原の仮宅（仮営業所）へ押しかけた。寄席もまた、大いに賑わったという。

この文章を読んでいて、全く勘違いしていたことに気づきました。ペリーがやってきた直後に第12代徳川家慶将軍が亡くなるなかで、幕府を率いてきたのが老中首座の阿部正弘でした。その後、阿部から堀田正睦に老中首座がうつりますが、わたしはてっきり阿部が「亡くなったから」または「南紀派の井伊直弼に対抗するため」堀田が老中首座になったと思っていました。

後で触れますが、阿部正弘は水戸派（一橋派）の薩摩藩主島津斉彬や越前藩主松平慶永と昵懇（じっこん）の間柄でした。南紀派の井伊直弼とは敵対関係といってもいいと思います。

でも、上記によると、安政江戸地震の復興に阿部が専心するために、外交は堀田正睦に任せた、と言うことだったみたいです。その後、阿部正弘は老中在職中に亡くなってしまいますが。

さて、その後、時代はどう動いたのでしょうか？

結論から話すと、安政江戸地震は幕末の政局にも多大な影響を及ぼした、といえます。藤田東湖らが亡くなってから、徳川斉昭は幕府の海防参与としても、発言力を無くし、安政4（1857）年に起こった「将軍継嗣問題」でも敗北します。

13代将軍の徳川家定には実子がおらず、健康面でも問題で、14代将軍を誰にするかで幕府内で二派に分かれて対立していきました。すなわち、水戸家から一橋家に養子に入った斉昭の子・慶喜を支持する「一橋派」と家定と血縁の近い紀州藩の慶福（よしとみ、のちの家茂）を擁する「南紀派」が対立したのです。

では、質問です。一橋派に属する主要な人物名を教えてください。

前水戸藩主徳川斉昭、親藩越前福井藩主の松平慶永（よしなが、春嶽しゅんがく）、薩摩藩主の島津斉彬（なりあきら）などがいますね。

南紀派に属する人物は誰ですか？

譜代大名の井伊直弼（いいなおすけ）ですね。

最終的には、徳川家定将軍の「判断」により、井伊が大老に就任し、次期14代将軍としては慶福に「白羽の矢」が立てられるたのでした。この後、ほとんど井伊直弼の独裁政治となり、一橋派や尊王攘夷派に対する弾圧である「安政の大獄」が開始されます。

江戸幕府がタウンゼント・ハリスと外交交渉をしていましたが、孝明天皇や朝廷は攘夷一色でした。国内各地でも、脱藩浪士などによる攘夷運動が広がっていきます。堀田正睦の朝廷への働きかけは徒労に終わってしまいます。それどころか、邪魔になったと言っても良いくらいですね。

そして、井伊直弼は孝明天皇の勅許を得ずに「日米修好通商条約」に調印します。これに怒った孝明天皇は8月に退位を表明し、さらに水戸家に対して直接、「幕府の専断を難ずる勅諭」を下します。

井伊大老は、それを逆さにとって、政敵らの弾圧をはじめていきました。9月には、「水戸密勅」＝「戊午（ぼご）の密勅」の首謀者とみなされた梅田雲浜（うんぴん）らが捕縛されていきます。

安政の大獄によって、条約締結を非難する尊皇攘夷派が粛清されたばかりか、一橋派も含めて104名が処刑されることになりました。本来、密勅などとは関わりのない吉田松陰や橋本左内までが処刑されていきました。

安政7年（途中で「万延」と改元されます）3月、大老井伊直弼は登城中の桜田門外で、過激な水戸浪士たちによって襲われて絶命しました。この結果、幕府の弱体化は加速度を増し、崩壊への一步を辿っていきます。

安政の大獄と、その後の「桜田門外の変」は、「幕末における日本の最大の分かれ道」といえると思います。その事実と、2年続けて3度起こった大地震とは無関係ではないでしょう。安政の江戸地震は、その1年前に送った安政東南海地震と共に、「明治維新への引き金となった」とすらもいえます。

地震が続き大きな被害が起きたわけですから、そこで生活していた人々にとっては、天が下した幕府に対する「天誅（てんちゅう）」と感じられたに違いありません。皮肉な言い方をすれば、薩長など討幕派にとっては都合の良い？地震だったといえるのかもしれませんが。

今回取り上げた岳真也氏の『今こそ知っておきたい災害の日本史』で、「災害が歴史を変える」よう

な場面をいくつか取り上げてきました。現代日本でも阪神淡路大震災や東日本大震災などの多大な損害を与えました。現在進行形のコロナ禍もそうですね。

教科書にはほとんど出てこないような「災害の歴史」はいかがだったでしょうか？他の災害、たとえば、関東大震災についても触れてみたかったのですが、ボリュームが大きくなりますので、江戸時代までで終わりにします。

今回もお読みいただき、ありがとうございました。

